

追悼文

黄意元氏の日韓歴史認識問題における大きな業績

西岡 力（麗澤大学特任教授・本研究会会長）

はじめに

本稿は、2025年（令和5年）11月14日に若くして逝去した黄意元・メディアウォッチ前代表の、日韓歴史認識問題における業績を顕彰することを目的としている。

黄氏は1977年韓国慶北大邱生まれ。2010年に韓国鉄道大学を卒業し、韓国容認素材、カナダ系の鉄道会社であるボンバルディア（Bombardier）韓国支社、韓国釜山素材釜山交通公社にて勤務後、2009年2月、メディアウォッチ創刊時から記者となり、2016年から2023年メディアウォッチ代表理事、2016年から2025年同編集局長を勤めた。⁽¹⁾

黄氏の日韓歴史認識問題での業績は大きく3つある。すなわち、①挺対協（挺身隊問題対策協議会）と北朝鮮の関係を明らかにしたこと、②元慰安婦李容洙氏の証言の矛盾に関する実証的調査、③日本の保守派の声を韓国で紹介し日韓真実勢力の連帯を強化、である。

本稿執筆の2026年の時点で見れば、この3つはさほど大きな業績とは思えないかもしれない。これらを黄氏が執筆ないし実行した時点で、韓国社会には慰安婦問題を独占していた挺対協と尹美香氏への批判には大きなタブーがあった。黄氏はそのタブーを打ち破る先頭に立った。

後述のように黄氏の活動は、李容洙氏が尹美香氏を公然と批判する動機となっている。その意味で、歴史を一步進める大きな意味がある業績だったと言える。

黄意元氏の日韓歴史認識問題での戦い年表

2009年	メディアウォッチ記者となる
2013年8月5日	※朴裕河世宗大学教授が『帝国の慰安婦 植民地支配と記憶の闘い』を韓国で出版。
2014年2月21日	「『従北』容疑が提起された関連団体、挺対協」発表
2014年7月	挺対協と尹美香が同記事を理由に黄氏を刑事告訴
2015年11月18日	※ソウル東部地検が朴裕河氏を刑法上の名誉毀損罪で在宅起訴
2016年11月17日	検察が黄氏を不起訴処分
2017年2月15日	尹美香氏と挺対協が、黄氏に民事訴訟を提起
2017年5月16日	ソウル高裁が不起訴処分の裁定申請を棄却
2018年4月14日	「『従北』文在寅のための『嘘つきおばあさん』、日本軍慰安婦李容洙」発表
2018年4月20日	挺対協が李容洙に言及せず、挺対協の名誉毀損だけに言及した

	公文をメディアウォッチに送付
2018年10月26日	ソウル中央地裁が民事訴訟一審で黄氏の完全勝訴判決
2018年10月30日	※韓国最高裁判所が日本製鉄に元朝鮮人戦時労働者への損害賠償支払いを命じる判決下す。日本政府は日韓条約で解決済みと強く反発。
2019年7月10日	※李栄薫氏らが『反日種族主義』を韓国で出版
2019年9月17日	※延世大学柳錫春教授が同大講義で慰安婦は売春の一種と話し、受講生が秘密録音したテープが持ち出され抗議が殺到。
2019年10月29日	ソウル中央地裁民事控訴12部が民事訴訟二審で黄氏完全勝訴判決
2019年12月～	※李宇衍氏、金柄憲氏らが毎週水曜日、旧日本大使館前で慰安婦像撤去デモ開始、黄氏も参加
2020年2月27日	最高裁判所が上告棄却、黄氏完全勝訴確定
2020年5月7日	※元慰安婦李容洙氏が尹美香氏と挺対協を批判する記者会見
2020年11月3日	※柳錫春氏をソウル西部検察が名誉毀損罪で在宅起訴、黄氏は柳氏の裁判闘争をサポート
2020年12月24日	西岡力著『ねつ造された徴用工のいない徴用工問題』出版（日本語原題『でっちあげの徴用工問題』）黄氏が企画編集を担当、李宇衍氏が翻訳（以下同）
2021年4月15日	西岡力著『韓国政府と言論が語らない慰安婦問題の真実』（『よくわかる慰安婦問題』）と『[資料集] 韓国政府と言論が語らない慰安婦問題の真実』出版
2021年7月2日	黄氏与李宇衍氏が『ねつ造された徴用工のいない徴用工問題』出版で国家基本問題研究所日本研究特別賞受賞
2022年9月21日	秦郁彦著『慰安婦と戦場の性』出版
2024年1月3日	ラムザイヤー他著『ハーバード大学教授が聞かせてくれる慰安婦問題の真実』出版、李宇衍・柳錫春訳
2024年4月22日	西岡力他著『徴用工問題、日本の歴史認識を語る』（『朝鮮人戦時労働の実態』）出版
2025年2月13日	※柳錫春氏が最高裁で勝訴

1 挺対協（挺身隊問題対策協議会）と北朝鮮の関係を明らかにしたこと

まず、第一の業績、挺対協（挺身隊問題対策協議会）と北朝鮮の関係を明らかにしたことについて見ていこう。

黄氏は2000年代後半から日本在住の韓国人評論家崔碩栄氏とインターネットを通じて知り合い、韓国社会の反日現象の虚構性などについて話しあったという。崔氏は日韓歴史認識問題に関する優れた著作を多数、日本語と韓国語で出版している。2011年11月からメディアウォッチにも寄稿している。

2013年8月5日、朴裕河世宗大学教授が『帝国の慰安婦 植民地支配と記憶の闘い』を

韓国で出版した。翌2014年6月16日、ナムムの家で共同生活する元慰安婦9人が、同書が自分たちへの名誉棄損だとして、出版差し止めと1人3千万ウォン計2億7千万ウォンの損害賠償を求める民事訴訟を提起した。また、2015年11月18日には、ソウル東部地検が同書の内容が「虚偽」だとして、朴氏を刑法上の名誉毀損罪で在宅起訴した。

慰安婦に関する書籍の出版に対して民事と刑事で訴えられるという現実を見て黄氏は、朴氏は左派であり思想的には一致しないが、学問の自由を守るという観点で彼女を支援しようと立ち上がった。その経緯について、黄氏はこう書いている。

私は十数年前から「メディアウォッチ」というメディア批評を展開するネット媒体の科学部、学術部記者を務めていた。つまり、日本を含む海外メディアは専攻ではなかったが、「韓国のメディアはなぜ、海外ニュースの中で日本関連については誤報を出しまくっているのか」については、いつも不思議でならなかった。

決してあってはならないが、メディアであれば誤報を出すことはないわけではない。だが、特定国家に関連して体系的、周期的に誤報一色になるのは、ミスや錯覚ではなく、そこに闇があることを意味する。

日本でも、『韓国「反日フェイク」の病理学』などの著書で知られる崔碩榮（チェ・ソギョン）氏と、筆者は2000年代後半からインターネットを通じて知り合い、韓国社会の反日現象について話してきた。崔氏は2010年に関連著書『キムチ愛国主義—言論の理由なき反日』を（韓国で）出版。左派団体のスキャンダルや、韓国のマスコミの偏向報道の真実などに関する情報を入手してメディアウォッチに寄稿し、韓国社会に蔓延する多くの嘘を暴き、真実を白日の下にさらした。

2013年に、朴裕河（パク・ユハ）世宗大学教授の『帝国の慰安婦 植民地支配と記憶の闘い』が出版された。本書は2007年に上梓された李榮薫（イ・ヨンフン）教授の『大韓民国の物語』と共に、慰安婦問題の核心である「強制連行説」などに対し、懐疑的立場を表明したものだ。慰安婦問題という単一テーマで出版された本としては、史上初めて異説を唱えたといえるだろう。

筆者は朴教授と政治意識や理念は多少異なるが、慰安婦問題に関連して画一化した声に疑問を感じていたという点では立場を同じくし、少数派であることから同志と意識していた。

朴教授が2005年に『和解のために 教科書・慰安婦・靖国・独島』を出版し、韓国最大の聖域を揺さぶってからというもの、朴教授の何か役にたてないかと考えていた私は、13年の『帝国の慰安婦』出版を好機と捉え、14年に「『従北』容疑が提起された関連団体、挺対協」という記事を執筆することになる。⁽²⁾

ついに、黄氏は2014年2月21日、「『従北』容疑が提起された関連団体、挺対協」という記事をメディアウォッチに書いた。

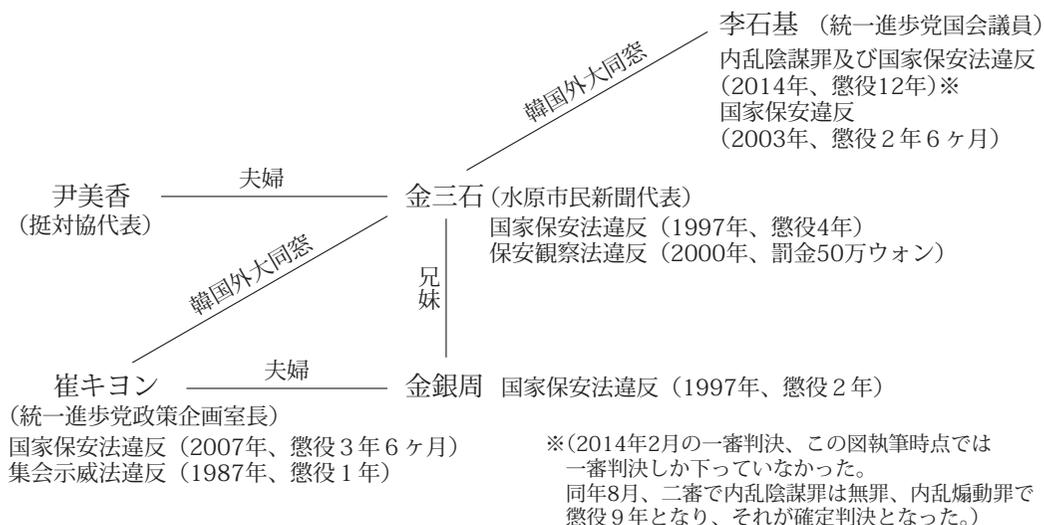
当時、韓国で挺対協は一切の批判を許さない強大な力を持っていた。そこで、本丸である慰安婦問題そのものへの切り込みを避け、挺対協が北朝鮮の手先であるというある意味、迂回的な批判を行った。その上、記事発表当初は自分の名前を出さず、女性記者名を使った。

今となっては日本でもよく知られるこの記事を発表した当時、筆者はある女性記者の名を借りねばならなかった。男性記者が女性団体の権力構造を批判することで、批判の矢面に立つことになると思ったからだ。その後、良心の呵責から執筆者名を实名とした。⁽³⁾

まず、「従北」という言葉を解説しよう。北朝鮮に追従しているという意味で、2000年代頃から韓国で使われるように言葉だ。従来は「親北」という言葉が使われてきたが、1987年の左翼思想解禁以来、地下活動をしていた北朝鮮の路線に基づき、韓国で革命を起こそうと活動する極左派が公然と活動を始めた。それらについて右派側から、彼らは北朝鮮と親しいという「親北」の範疇を超えているとして、「従北」という用語が使われるようになった。

同記事の内容を紹介しよう。冒頭に「慰安婦関連団体である挺身隊問題対策協議会尹美香代表の従北関連人脈関係」と題する、以下のような図が置かれている。尹美香・挺対協代表(当時)の肉親に、北朝鮮のスパイになって国家保安法違反で有罪になった者が多数存在し、その人脈が北朝鮮と内通して武装蜂起を準備した李石基・元国会議員につながっていることを示す図だ。

慰安婦関連団体である挺身隊問題対策協議会尹美香代表の従北関連人脈関係



黄氏は挺対協が「従北」すなわち北朝鮮に従属している根拠として、この図にある従北関連人脈をまず上げた。当時の挺対協代表の尹美香氏の夫、金三石氏とその妹金銀周氏は兄妹スパイ事件で国家情報院に摘発され、国家保安法違反で兄は懲役4年の実刑判決を、妹は懲役2年執行猶予3年の有罪判決を受けている。その上、金銀周氏の夫、崔キヨン氏は一心会スパイ事件でやはり国家情報院に摘発され、国家保安法違反で懲役3年6ヶ月の実刑判決を受けている。

次に黄氏が問題にしたのは、金三石氏、崔キヨン氏が北朝鮮と内通して武装蜂起準備

をした李石基・統合進歩党国会議員と親しいということだ。その3人は従北派学生運動の拠点として有名だった、韓国外国語大学の同窓生だった。黄氏は記事で、金三石氏が李石基議員と親しく談笑する写真を公開した。李石基氏は北朝鮮と内通して武装蜂起の準備を進めて、国会議員時代の2013年9月に逮捕され、内乱煽動罪で実刑判決を受けた大物北朝鮮スパイである。

もう一つ、黄氏は記事で、挺対協と尹美香氏が金正日死亡時に弔電を送り、韓国の裁判所が反国家団体として認めている朝鮮総連と交流をしていることなども、従北の証拠として指摘した。

黄氏がこの記事を書いた時点では尹美香氏の夫、金三石氏は兄妹スパイ事件について、国家情報院によるえん罪と主張していた。黄氏はこの記事で、えん罪と主張しながら再審請求をしていないと指摘した。するとこの記事が出た1ヶ月後の2024年3月に、金三石氏は再審請求を行った。2016年3月25日に再審判決が下り一部が無罪となったが、金三石氏が国家保安法違反であることは再度認められている。⁽⁴⁾

以上のような、尹美香氏の夫らが北朝鮮のスパイとして有罪判決を受けていたことについては、かなり前から韓国と日本の一部専門家の間では知られていた。私は2007年6月に日本で出版した『よくわかる慰安婦問題』のあとがきで概略を書き、2012年12月に出した同書の文庫増補版でより詳しく書いている。⁽⁵⁾

黄氏が記事を執筆した2014年2月頃、韓国のネットでも匿名で挺対協が北朝鮮とつながっていることを告発する情報提供が行われていた。黄氏はそれらを新聞記事やネット上の写真などで一つ一つ確認しながら、同記事を書き進めた。

匿名のネット書き込みではなく、ジャーナリストによる記事の意味は大きかった。挺対協と尹美香氏はそれを許さなかった。それだけ社会的影響力があったということだ。

2014年7月、挺対協と尹美香氏が黄氏を刑事告訴した。挺対協と尹氏を対象とした「従北」という表現は虚偽事実であり、彼女らの名誉を毀損したという理由だった。

2016年11月17日に検察は不起訴処分にした。検察は、「従北」という表現は真偽を争う事実摘示ではなく、意見表明に過ぎないと判断した。不起訴理由通知書で検察は、「韓国社会でまだ『従北』の概念は定立しているとは見ることは出来ず多様な意見が存在する余地がある」とし、「被疑者黄意元が告訴人らに『スパイ』や『利敵団体』、『大韓民国正統性否定』などの表現を使わなかった点などを勘案して、嫌疑なしとする処分を下した」と明らかにした。⁽⁶⁾

刑事処分の道が閉ざされるや、挺対協と尹美香氏は2017年2月15日、黄氏に対して民事訴訟を起こした。⁽⁷⁾

刑事告発と同様に、「従北」という表現は虚偽事実であり、名誉を毀損したという理由だった。しかし、挺対協側はメディアウォッチの記事のどこが虚偽なのかについて示すことができなかった。黄氏の記事はすべて公開資料を引用して書かれたものだからだ。

2018年10月26日、黄氏は一審ソウル中央地方裁判所で完全勝訴した。⁽⁸⁾ 判決で裁判官は「従北」の指摘をはじめとする全ての争点でいかなる虚偽もなかったと明らかにした。

一審判決によると、黄氏は挺対協と尹氏を「従北」と呼ぶ根拠として、次の7つなどを挙げた。

① 尹美香代表の夫(金三石)、その妹(金銀周)、挺対協対外協力委員長の夫(韓チュ

- ンモク)、挺対協の執行理事の夫(崔ドンジン)に国家保安法違反の経歴があること、
- ② 李石基前統合進歩党国会議員が挺対協行事に参加し、尹代表の夫との親交を見せたこと、
 - ③ 従北傾向にある韓神大神学科出身の尹代表が、従北活動をしてきた者に授与されることで知られる「ヌルボム統一賞」を受賞したこと、
 - ④ 尹代表が在日従北団体である在日朝鮮学校支援運動により、国家保安法違反容疑でEメールの押収捜索を受けたこと、
 - ⑤ 2000年北朝鮮産松花粉を販売し、収益金の一部で北朝鮮を支援する事業を行ったこと、
 - ⑥ 金正日死亡当時、「金正日国防委員長長の逝去という突然の悲報に、北の地の同胞の皆さんに深い哀悼を伝える」という内容の弔電を北朝鮮側に送ったこと、
 - ⑦ 定期的に開催されている水曜集会で「天安艦事件隠蔽及び対北圧迫即刻中断」「サードミサイル配置反対」など、反米・従北的な内容の声明書を発表したこと。

一審判決は、これら全ては真実か真実と信じる理由があると判断した。つまり、これらが虚偽であるとの証明はなされず、それらを主張することは言論の自由の範囲であり、名誉毀損にならないということが認められた。

この判決は、極端な反日政策を展開した文在寅政権下で下された。黄氏は「この判決が文在寅政権下で出たことが信じられない」⁽⁹⁾と、驚きの感想を記している。

2019年10月29日、ソウル中央地方裁判所民事控訴12部は一審判決を支持する判決を下した。同判決は「(黄氏が)侮辱的で軽蔑的な人身攻撃に該当したり、あるいは挺対協と尹氏の身上に関して多少の誇張を越えて事実を歪曲する公表行為をすることにより、その人格権を侵害したと見るに足る証拠がない」と明らかにした。⁽¹⁰⁾

2020年2月27日、韓国最高裁判所(大法院)は挺対協の上告を棄却し、黄氏の完全勝訴が確定した。メディアウォッチは勝訴確定を伝える記事⁽¹¹⁾で、「これから挺対協とその代表の尹美香氏を『従北』と呼べることになった」と書いた。筆者はメディアウォッチ編集部とされているが、この記事は黄氏が書いたことは間違いないだろう。韓国の言論の自由を守り、挺対協批判のタブーを破ったという点で、この確定判決は黄氏の大きな功績と言える。

2 元慰安婦李容洙氏の証言の矛盾に関する実証的調査

挺対協と尹美香氏との民事訴訟で、黄氏は法廷に事実関係を証明する資料を多数出すだけでなく、挺対協が従北であるというキャンペーンを続けた。その中で、黄氏はついに本丸である慰安婦問題の嘘を正面から告発する覚悟を決めた。黄氏は、元慰安婦として挺対協とともに全世界を巡って慰安婦性奴隷説を拡散していた、李容洙氏の過去の言動を収集分析する作業に入った。

当時、韓国では元慰安婦の証言に批判的検討を加えることはタブーだった。日本では私や秦郁彦氏が、1990年代末から李容洙氏を含む元慰安婦証言の矛盾指摘を行っていた。⁽¹²⁾しかし、その成果は韓国では全く紹介されていなかった。黄氏は日本のウィキペディアの慰安婦項目を、韓国語に翻訳する作業をする中で、慰安婦強制連行の根拠として残っ

ているのは元慰安婦証言だけだということなど、日本での議論の推移を知った。その上で、韓国で初めて元慰安婦李容洙氏の過去の証言の変遷に関する徹底的調査を行ったのだ。

その成果を黄氏は「『従北』文在寅のための『嘘つきおばあさん』、日本軍慰安婦李容洙」という題で、メディアウォッチ2018年4月14日に掲載した。挺対協批判の最初の記事と同様、女性記者の名前で発表した。現在もネット上では女性記者の名前が残っている。だが、黄意元氏が書いたものだ。

あまりにも膨大な量だったので、(1)から(3)に分けて掲載した。これは記事と言うより、論文だった。以下、論文という表現を使う。

ここで(1)から(3)には、内容を具体的に示す副題がついていた。その副題を紹介する。

- (1) 李容洙と挺対協によって結局、国際詐欺劇に転落する危険に直面している我が国の日本軍慰安婦問題
- (2) 日本軍将校のために靈魂結婚式まで行ってやった李容洙、年齢、結婚、職業まで全部が虚偽嫌疑
- (3) 民主統合党比例代表国会議員まで申請して「従北」文在寅、「従北」挺対協といっしょに反米活動に余念のない李容洙

(1)の主要部分を私が日本語に訳し、『正論』2020年8月号が掲載した。それを本号で再録した。(1)で圧巻なのは李容洙氏の証言の変遷をまとめた表だ。紙数の関係で『正論』ではそれが収録されていないが、本号にはそれを入れた。

黄氏は、李容洙が1993年以来、様々な場所で行った20の証言を集めて、①慰安婦になった経緯、②時期、③年齢、④慰安所に連れて行った主体、⑤慰安婦生活をした期間、について表を作って比較した。その結果、それが全部異なっていることを具体的に明らかにした。

慰安婦になった経緯の証言を調べると、李容洙氏は1992年に挺対協が編集した証言集では「(日本人男性から)赤いワンピースと革靴…をもらって、幼心にどんなに嬉しかったかわかりません。もう他のことは考えもしないで即座について行くことにしました」と語っていた。

ところが、2002年6月26日の日本共産党機関紙『赤旗』では「十四歳で銃剣をつき付けられて連れてこられた」と証言を大きく変えた。ただしこの段階では、銃剣を突きつけた主体については語っていなかった。

2018年3月10日、フランス議会では「軍人が鋭いもので背中を刺しました。そんなふうにして駅に連行されたのです」として、日本軍人によって強制連行されたと、また証言を変えている。以上のような変化を表にしてまとめて、強制連行されたという証言の信憑性に疑問を提示した。

黄氏はこの(1)～(3)の長文の論文で明らかにしたことについて、次のようにわかりやすく語っている。

全部、内容がちがっている。前と後ろが一致するものが一つもない。代表的なも

のをあげると、最初は日本人に連れ去られたといていたのが、後には日本軍人にかわる。最初は赤いワンピースに革靴に誘惑されてついて行ったといていたのが、後には刀を背中に突きつけられて連れて行かれたとかわる。期間も自分は1944年に連れて行かれたといいながら、3年間慰安婦生活をしたという。話にならない。1945年8月に韓国は植民地から解放された。それで計算が合わないから、あとで年度が1942年にかわった。ところが、また1944年にかわり、再び期間が8ヵ月にかわり、このようなことばかりだ。

2007年2月に米国議会に行つて証言した。これが後日、『アイキャンスピーク』という映画にもなった。2018年3月にフランス議会に行つて証言した。ところが、本当に深刻な問題だが、米国議会証言とフランス議会証言がちがっているのだ。国際社会でもっとも公式的な証言がちがっている。

2007年2月米国議会証言では、1944年に連れて行かれたと言っている。その証言の中でも矛盾がある。そこでも3年間、慰安婦生活をしたと言っている。そしてそのときには連れて行った主体について話していない。ただ、連れて行かれたとしか言わない。日本軍という話も、刀という話もなかった。ところがフランス議会では、日本軍が自分の背中に刀を突きつけて連れて行った、という。

93年には、赤いワンピースと革靴に誘惑されて日本人について行った、だった。証言が日本軍強制連行の方向に次第に過激になっていく。最初は日本軍強制連行ではなかったのに、次第に過激になっていって、2018年フランス議会証言では完全に日本軍強制連行だと断定した。それで私たちは到底彼女を信じられない、ニセ慰安婦だと私たちは見ている。本人が自白をしない限り、本当のことは分からない。慰安婦証言は物証がない。第三者の証言さえない。目撃者もない。唯一本人の証言しかない。それだからこそ、本人証言の一貫性くらいはなければならぬのに、李容洙氏の公的な証言は一貫しているものが一つもない。

それで李容洙氏について、ニセ慰安婦疑惑を提起しました。⁽¹³⁾

李容洙氏のこのような証言の変化については、秦郁彦氏が『諸君！』2007年7月号で、すでに表にして分析し、『「家出」が正しい』と結論を下していた。⁽¹⁴⁾しかし、黄氏がこの論文を発表した2018年頃には、韓国では元慰安婦、特にその中でも李容洙氏はあたかも独立運動家だったかのように扱われ、一切の批判が許されない存在だった。

2017年9月に米議会で証言する彼女をモデルにした「アイ・キャン・スピーク」という映画が公開され、30万人の観客を集めた。同年11月に訪韓したトランプ米大統領の歓迎晩餐会に招かれて、トランプ氏に抱きつくというパフォーマンスまでした。彼女は自分のことを「元慰安婦」ではなく「女性人権活動家」だと名乗っていた。その李容洙氏のことを、黄氏は「嘘つきおばあさん」だと断定したのだ。当時としては本当に勇気のある行動だった。

黄氏の論文執筆は、李容洙氏の尹美香氏批判記者会見という大きな出来事を生み出す契機になった。その経緯を見ておこう。

黄氏は2018年4月14日に、長文の李容洙氏批判論文をメディアウォッチに掲載した。掲載と同時に黄氏は挺対協に論文掲載を知らせ、反論があるならメディアウォッチに掲載するとメールで知らせた。すると4月20日に挺対協から公式文書が送られてきた。短い

ものなので、その全文を訳載する。

1、すでに類似する内容の記事に関して、民事訴訟（ソウル中央地方裁判所2017カデザイン503545事件）が進行中であり、挺対協の立場は該当事件の準備書面を通じて何回も表明したことがあるところ、「メディアウォッチ」は挺対協が「名誉毀損」に該当すると主張した内容を、また記事の形態で反復的に掲載している点などを総合するとき、挺対協は「メディアウォッチ」が挺対協を悪意的に誹謗する目的で、同じ内容を反復的に報道しているのではないかと、深刻な憂慮を表明せざるを得ないです。

2、送って下さった記事に関しては検討中であり、必要な場合適当な経路を通じて意見表明予定であり、敢えてEメール、電話、カカオトークメッセージなどを通じて同じ内容を反復的に送らなくても良いです。⁽¹⁵⁾

驚くべきことに、ここで挺対協は自分たちに対する批判に対してだけ憂慮を表明し、黄氏論文の主題である李容洙氏への批判について言及していない。挺対協は李容洙の名誉を保護する意思を示さなかった。それどころか、黄氏によると、この記事が出た後頃から、挺対協は李容洙氏を運動の前面に出さなくなった。⁽¹⁶⁾

2020年5月、尹美香氏が国会議員選挙に当選したことに不満を覚えた李容洙氏が、尹氏と挺対協を激しく批判する記者会見を開いた。

2020年5月7日に李容洙氏は、自分の住んでいる大邱で記者会見を開いた。その場で彼女は、これまで共に反日運動をしてきた挺対協と、その前理事長で与党の比例候補上位で当選した尹美香氏に対して、集めたお金を自分たち元慰安婦に渡していない、尹美香氏は国会議員になるべきではない、などと激しく批判した。⁽¹⁷⁾ それまで約30年間、尹美香氏、挺対協とともに活動してきた彼女の批判は大きな衝撃を与えた。韓国マスコミは集中して尹美香氏と挺対協のずさんな資金管理や、北朝鮮との親密な関係などを批判する記事を多数掲載した。

実は会見で李容洙氏は、挺対協が出した証言集について、自分はそこに書かれているように話していないのに、それを販売して金儲けしていると批判した。

1993年から本が出たでしょう、挺身隊対策協議会から。それを6500ウォンで販売していたのです。そこに出ている証言は間違っています。私はなぜ、そんな本を売るのがかと言いました。⁽¹⁸⁾

李容洙氏のこの発言を、韓国はもちろん日本でもほとんど注目しなかった。なぜ、李容洙氏が挺対協の証言集を批判しているのか。そこに、李容洙氏と挺対協の内紛の根本原因が潜んでいる。それを示唆する記事が、李容洙氏の会見の直後の5月9日に左派系の『ハンギョレ新聞』に出た。

正義連帯の内部事情をよく知っている関係者は、「日本と保守陣営などで李容洙おばさんについて『ニセ被害者』だなどの攻撃があったが、李おばさんが公開的な席で『言われるとおりの証言をしてきたのになぜ、保護してくれないのか』と、正義連

帯への不満を吐露したこともある。⁽¹⁹⁾

ここで保守陣営と言われているのは、韓国内の保守陣営のことだ。先述したとおり、李容洙氏が日本軍による強制連行によって慰安婦になったのではないということは、日本ではかなり早くから論じられていた。秦郁彦氏や私も、挺対協が出した証言集などを根拠にして、そのような判断を1990年代後半に書いていた。繰り返して書くが、問題はその日本での研究成果が、韓国に伝わってないことだった。

ところが、韓国の保守陣営からも李容洙証言批判が出てきた。まさに黄意元氏の長文の論文が2018年4月14日インターネットに出て、それがじわじわと韓国の中で浸透し始めていたのだ。2019年7月10日に慰安婦は戦場における公娼だと論じた『反日種族主義』が出版され、韓国内で11万部が売れるベストセラーになった。その編著者である李栄薫氏は私に、同書の慰安婦関係の章を執筆するときに黄氏の論文を参考にしたと語っている。

韓国社会でひろがる嘘つきという批判を李容洙氏は強く意識し、なぜ挺対協は自分を守ってくれないのかと不満を持っていた。一方、挺対協側は李容洙の証言の嘘は隠しようもないので、彼女を運動の正面に出すことを控えるようになった。この運動内部の矛盾が2020年5月7日李容洙氏の挺対協批判会見という形で表面化し、韓国の左派の反日運動に大きな打撃を与えた。黄意元氏の歴史に残る大きな功績だ。

3 日本の保守派の声を韓国で紹介し日韓真実勢力の連帯を強化

話を少し過去に戻す。黄氏が『「従北」文在寅のための『嘘つきおばあさん』、日本軍慰安婦李容洙』を発表した2018年4月14日から半年後の同年10月30日、韓国最高裁判所が日本製鉄に元朝鮮人戦時労働者への損害賠償支払いを命じる判決を下した。それに対して日本政府は、日韓条約で解決済みと強く反発した。日韓関係は悪化の一途をたどった。

私はその判決は国際法違反だけでなく、歴史認識において虚偽に基づくと考え、判決批判、戦時労働者の実態、戦後戦時労働者問題が日韓でどのように処理されてきたか、などをまとめて、翌2019年4月1日に日本で『でっちあげの徴用工問題』を出版した。同年7月10日、韓国で『反日種族主義』が出版された。その中で戦時労働者問題について3つの章を担当したのが、李宇衍氏だった。

李宇衍氏は韓国近代経済史専攻の気鋭の学者で、韓国における戦時労働者問題の実証研究の第一人者だった。その李宇衍氏が2020年1月拙著を読み、これはどうしても韓国語に翻訳して韓国で紹介しなければならない、と考えたという。

2020年1月25日の旧正月の少し前、雪の降る夜、李宇衍氏は研究室で夜を明かして『でっちあげの徴用工問題』を読み終え、この内容をどうしても韓国語にして多くの韓国人に伝えなければならないと思い、真夜中の午前3時か4時頃に黄氏に電話した。⁽²⁰⁾ そのときのことを、李宇衍氏はこう回想している。

日本と歴史問題で争っているが、その争点になっている「慰安婦」問題や「徴用工」問題に対して正確に書かれた本、たとえそれが「日本極右」とすぐ貶められる著者の本でも、歴史的事実には忠実であれば韓国にも伝えなければならない。翻訳者はもち

ろん出版社も負担はひどく大きいだろうが、それでもやるべきことはやらなければならないのではないか、メディアウォッチがその先鋒に立ってくれることを望むと話した。

黄代表が懇懇に辞退しないかと思い、それでも尋ねてみなければならないとの考えから、また「もしかしたら」と思い連絡したのだ。ところが「グッドアイデア」という答えが返ってきて、その一言で私たちは意気投合して、励まし合って翻訳を始めた。⁽²¹⁾

正確に日付は記憶していないが、たぶんその電話のやりとりの後、黄氏が私に国際電話をかけてきた。そこで次のようなやりとりをした。

黄 西岡先生の『でっちあげの徴用工問題』を韓国語に翻訳して出版したいです。李宇衍さんが翻訳すると言っています。

西岡 気が狂ったのですか。私は韓国で「極右」というレッテルを貼られている。その私の特に歴史問題の本を韓国で出したら、出版社と翻訳者は韓国社会で袋だたきにされますよ。やめた方が良いです。

黄 そのことは覚悟の上です。西岡先生の本を韓国で出すことで、私たちは一定の不利益を被ることはよく分かっています。しかし、私たち韓国保守派は韓国内で、徴用工や慰安婦の問題などの嘘と戦っています。その嘘との戦いを日本の保守派がかなり前から続けてきたことを知っています。その成果がほとんど韓国に伝わっていません。西岡先生の本を翻訳出版して韓国保守派が得る利益と私たちが被る不利益を比べると、利益の方が大きいと判断しています。ですから不利益を被ることを承知の上で、先生の『でっちあげの徴用工問題』を韓国語に翻訳して出版したいです。

西岡 そこまで言うのであれば、翻訳出版に全面的に協力します。印税はいりません。⁽²²⁾

その年（2020年）の12月24日、『ねつ造された徴用工のいない徴用工問題』（日本語原題『でっちあげの徴用工問題』）が李宇衍氏翻訳、黄氏が編集を担当してメディアウォッチから出版された。



『ねつ造された徴用工のいない徴用工問題』

コロナウイルスパンデミックのため私はその頃、訪韓が困難だったので、李宇衍氏が韓国内の保守派のユーチューブテレビに出続けて、本の宣伝を行った。

同書出版直後、いくつかの保守ユーチューブテレビが好意的に取り上げた。チャンネル登録67万人のペンアンドマイクTVもその一つだ。ペンアンドマイクTVでは2021年1月12日に、『月刊朝鮮』の特ダネ記者として有名で『反日種族主義』の共著者でもあるジャーナリスト金容三氏が、拙著の翻訳者李宇衍氏と約1時間、本を紹介する対談番組を放映した。

その中で金容三氏はつぎのような発言をした。日本の保守派の歴史認識問題での戦いを全く知らなかった韓国保守派が、同書を読んで真実を学んだと率直に吐露している。黄氏が同書出版で狙ったとおりの反応が韓国保守派で起きたことが、この発言でよく分かる。

この本を書いた西岡先生的心情を私はある程度推察してみたのです。「本当に韓国の人たちはあまりにもひどすぎる。政府もそうだし、最高裁もそうだ。集団的な一種の精神疾患にかかっているのではないか」と感じるくらいですよ。歴史的事実とは全く関係がない一種の虚像を根拠にして、2018年10月の戦時労働者判決が出たのですが、これを私たちはどうすれば良いのか。

私はこの西岡先生の本を読みながら、本当に辛かったです。われわれはこの程度でしかない国なのか。韓国の集団知性はこの程度の、ゴミ箱にしかならない状況なのか。

いまや、われわれは正常な国にならなければならない。事実にないことを根拠にして、最高裁までこのような判決を出せば、大韓民国の知性はないとみるべきではないですか。良心も正義もないということだ。どうして大韓民国政府と最高裁が、その悪辣な何人かの左翼知識人たちに惑わされてこのようなことをするのか、ということです。

コロナが少し収まれば、本当に日本に対して謝罪団をつくって、土下座して申し訳ないという謝罪からしなければならぬのではないかと。ここまで、でたらめ、ウソ判決と無理すぎる主張をする政府を持つ国に希望がありますか。

この本は、日本の本当の良心的知識人が韓国人の知性と良心に訴えるものです。矢のように心に突き刺さる内容にあふれています。このような本を通じて、われわれは徴用工の問題が何であり、そして今後どのような大きな影響をわれわれに及ぼすのか、徴用工問題を主張している韓国最高裁と韓国政府と韓国の左翼が、いかに勉強をしておらず、無知で嘘つきなのかについて、目覚めなければならないと思います。

黄氏はすぐ次の翻訳書出版に取りかかった。『ねつ造された徴用工のいない徴用工問題』出版からわずか4ヶ月も経たない2021年4月15日、西岡力著・李宇衍訳『韓国政府と言論が語らない慰安婦問題の真実』(『よくわかる慰安婦問題』)と、西岡力他著・李宇衍訳『[資料集] 韓国政府と言論が語らない慰安婦問題の真実』を出版した。



『韓国政府と言論が語らない慰安婦問題の真実』



『[資料集] 韓国政府と言論が語らない慰安婦問題の真実』

資料集は日本語の原書はない。黄氏が韓国語で出版するために、慰安婦関連の日本語資料を編纂した。収録されているのは、1「朝日新聞の『慰安婦報道』に対する独立検証委員会報告書」、2「日本政府の河野談話検証報告書」、3「日本政府の国連クマラスワミ報告書に対する反論書」、4「国連クマラスワミ報告書」、5 西岡力「韓国慰安婦運動の内紛」(『歴史認識問題研究』第7号)、6 西岡力「ハーバード大学慰安婦論文撤回要求経済学者声明の事実関係誤謬」(『歴史認識問題研究』第9号)だ。5と6はメディアウォッチ編集部と朴舜鍾氏が翻訳した。

繰り返して書くが、わずか4ヶ月未満でこれだけの翻訳出版を行ったのだ。黄氏が仕事を急いだ理由は、柳錫春延世大学教授の裁判²³の証拠として、どうしてもこの2冊が必要だったからだ。黄氏は当時私に、「裁判に間に合わせるため、必死で作業を進めている。少し仕事が粗くなることを許して欲しい」と連絡してきた。

この2冊の同時出版の少し後、2021年7月2日、国家基本問題研究所(櫻井よしこ理事長)が黄氏と李宇衍氏に、『ねつ造された徴用工のいない徴用工問題』出版によって日本研究特別賞を授与した。

黄氏は日本研究特別賞を受賞したとき、日韓の保守派の連帯の意義に「全世界で日本の自由保守派ほど『自由統一大韓民国の未来を考える韓国人たち』と思想理念はもちろん、利害関係を共有する勢力、同志は見出せない」として、次のように語っている。

韓国社会は、1990年代までは主に「右派政治権力」による検閲が問題視されてきました。しかし、1990年代から今日までは特に「左派言論権力」による検閲が、国家公論の発展と国益に対する国民の正しい判断を妨げる最大の癌的要因として指摘されています。この新しい検閲権力により、韓国社会で最も強く印象操作がなされて来た犠牲者が、海外では恐らく国家基本問題研究所や安倍晋三(前)総理等に代表される「日本の自由保守派」ではないでしょうか。その悪影響は非常に深刻で、僅か三年前の2018年でさえも、韓国人は日本の「安倍晋三」より北朝鮮の「金正恩」に倍以上の好感を抱く、という世論調査結果が発表された程です。

韓国の自由保守派の代弁紙であるメディアウォッチの考えは、以前からこのような韓国世論の大多数と大きく異なっていました。全世界で日本の自由保守派ほど「自由統一大韓民国の未来を考える韓国人たち」と思想理念はもちろん、利害関係を共有する勢力、同志は見出せないというのが、メディアウォッチの確固たる考えでした。そして、これは検閲権力の横暴さえなければ韓国人の誰の目にも明らかであり、従ってメディアウォッチは様々な「アンチ反日」のコンテンツを介して、このような検閲権力と闘って来たのであり、また徴用工問題と慰安婦問題の真実と関連したメディア出版作業も展開して参りました。

メディアウォッチは今後も「世界の自由・保守の声叢書」というシリーズ物で、日本の自由保守派の声を韓国にそのまま紹介する作業を続ける予定です。韓国の自由保守派は、偽りの扇動と力づくではない、明澄な論理と事実で政敵を制圧する文明的な闘争技術、議論文化について、日本の自由保守派から少しでも学びたいと思います。一方、韓国の自由保守派も朝鮮戦争時から冷戦時期、最前線で反共自由のために闘ってきた名分と経験を、やはり日本の自由保守派に正しく伝えたいと思います。

終戦から七十年経ち、事実上初めてと言える両国の自由保守派同士の真摯な疎通は、かなりの意味を持ちます。東アジア地域は現在、世界のどこよりも自由民主、市場経済、法治、人権の価値が求められています。反韓史観、反日史観に挑戦する両国の自由保守派を中心とした日韓の真実同盟だけが、この価値の発展、普及の唯一の希望です。²⁴⁾

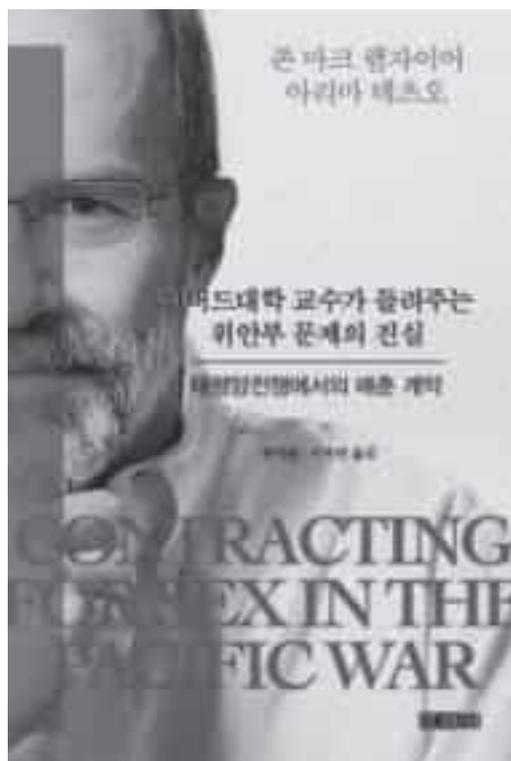
その後も黄氏は日本保守派の本の翻訳事業を続けた。2022年9月21日、秦郁彦著『慰安婦と戦場の性』、2024年4月22日、西岡力他著『徴用工問題、日本の歴史認識を語る』（『朝鮮人戦時労働の実態』）を出版した。また、米国学者の慰安婦に関する研究の韓国語での出版も行った。2024年1月3日にラムザイヤー他著・李宇衍・柳錫春訳『ハーバード大学教授が聞かせてくれる慰安婦問題の真実』を出版した。



『慰安婦と戦場の性』



『徴用工問題、日本の歴史認識を語る』



『ハーバード大学教授が聞かせてくれる慰安婦問題の真実』

また、受賞の言葉で黄氏は「世界の自由・保守の声叢書」シリーズの出版を続けると語っていた。同叢書は2026年1月現在、7冊が出版されている。そのうち、1『ねつ造された徴用工のいない徴用工問題』、2『韓国政府と言論が語らない慰安婦問題の真実』、3『[資料集] 韓国政府と言論が語らない慰安婦問題の真実』までは日本保守派の研究の紹介だったが、4から7は中国共産党の脅威を告発する世界の保守派の本が翻訳された。

4 ジョン・マンソープ『パンダの爪、カナダに浸透した中国共産党』（日本語訳なし）、5 呂秀蓮（元台湾副総統）『台湾はなぜ中国に対抗するのか』（日本語訳なし）、6『豪州と中国の予定された戦争』（『月刊Hanada』編集部『目に見えぬ侵略』『見えない手』副読本の韓国語訳）、7 アントワーン・イザンバール『フランスと中国、危険な関係』（日本語訳なし）。

黄氏は台湾保守派と日韓保守派の連帯も構想し、そのため韓国内で民間運動を展開していた。2025年8月25日に黄氏は延世大学で開催された「東北アジア情勢と北朝鮮解放：李承晩の夢」フォーラムの討論者発表文でこう述べている。

私がメディアウォッチにいたとき、日本だけでなく台湾との善隣関係を回復させる活動をしました。韓国と台湾は30年前にとても悲劇的な断交をしました。それに対する謝罪次元で、韓国の市民社会でも台湾との国交正常化主張をする必要がある、このような次元で東北アジア関連の市民運動をやはり辺熙宰メディアウォッチ代表が提唱をして、私が補助をしました。そして、この市民運動に注目された台湾の呂秀蓮元副総統が関心をお持ちになってくださり、そこで私たちが呂元副総統の韓国国会議事堂での演説を推進し、この行事は盛大に行われもしました。この韓国・台湾国交正常化運動は、2年目である2020年から、敢えて韓国・台湾・日本国交正常化運動に拡大し（ました）²⁵

おわりに 黄氏の日韓保守派への提言「真実のための戦い続けよ」

本稿を閉じるにあたって、黄氏が日韓保守派に、真実のための戦いから逃げてはならない、戦い続けよと提言していたことを強調したい。それが黄氏の私たちへの遺言だ、と思うからである。

2022年3月23日、歴史認識問題研究会は東京で学術セミナー「佐渡金山における朝鮮人戦時労働の実態」を開催した。黄氏は同セミナーで「韓国内における日本佐渡金山世界遺産登録反対運動の実態」と題するリモート発表を行った。その中で、黄氏は次のように提言した。

日本は自らの真実の前で、まず堂々とあらねばならない。真実は一旦横に置き、無難が何よりというような、真実ではなく、友好を最善に据える日本の韓国に対する態度は、韓国と日本、両国の望ましい未来のために絶対に良くない、と認識しなければならぬ。

日本は、端島登録は何とか成功したとして、或いは韓国が相対的親日政権になったとしても、緊張を緩めてはならない。1615年のある春の日、大坂の陣を終え一息

ついていた井伊直孝に徳川家康は、「勝利の時こそ、兜の紐を絞めなければならない」と助言した。つまり、少しの気も許してはいけないということである。

日本が真実の前で一步、退いたり、或いは友好という大義に屈服する態度を取る瞬間、「韓国」正確には「韓国の虚偽勢力」が、容赦なく「反撃の刀」で「韓国と日本の真実勢力」の士気を挫くであろう。

韓国の虚偽勢力は、既に日本側の歴史戦宣伝布告を受け入れた。今こそ韓国と日本の真実勢力が更に断固たる立地を固め、その攻撃に対抗する時である⁽²⁶⁾と考える。

註

- (1) 「韓国で最も『尹美香＝挺対協』を知る記者の告白、『6年に亘る我が闘争』『デイリー新潮』(電子版)2020年7月2日、2026年1月29日閲覧。
- (2) 同上
- (3) 同上
- (4) 金三石は2016年に再審請求をし、2017年5月大法院は、国家保安法違反は間違いないとしながらもスパイ容疑はないとして、懲役2年・執行猶予3年に減刑し、1億9000万ウォンの刑事補償金が支払われた。それを受け金三石、尹美香夫婦と娘は、スパイとの烙印を押され精神的苦痛を受けたとして、国に対し損害賠償請求訴訟を起こし、2018年7月ソウル高等裁判所は、家族3人に計8900万ウォンを支払うよう命じる判決を言い渡した。
- (5) 西岡力『よくわかる慰安婦問題』草思社、2007年6月28日、215～216頁。『増補新版よくわかる慰安婦問題』草思社文庫、2012年12月14日、第9章。
- (6) メディアウォッチ編集部「検察、「挺対協は『従北』だと呼ぶこと出来る」…挺対協本紙告訴、嫌疑無し処分」『メディアウォッチ』(電子版)2016年12月18日、2026年1月28日閲覧、引用翻訳は西岡、以下同。
なお、2017年5月16日、ソウル高等法院は尹美香側が提起した不起訴処分の裁定申請を棄却した。メディアウォッチ編集部「ソウル高裁『挺対協を従北と呼ぶこと出来る』…挺対協の裁定申請棄却」『メディアウォッチ』2017年5月17日、2026年1月28日閲覧。
- (7) 李ウヒ「従北団体挺対協、『従北ではない』と11名をまとめて民事訴訟…証拠はどこに？」『メディアウォッチ』2017年3月28日、2026年1月28日閲覧。
- (8) メディアウォッチ編集部「メディアウォッチvs挺対協判決全文…裁判所『従北疑惑提起…違法性ない』」『メディアウォッチ』2018年11月1日、2026年1月28日閲覧。
- (9) 『デイリー新潮』同上。
- (10) シンギュヤン「本紙、挺対協に『従北』訴訟控訴審でも全部勝訴…裁判所『挺対協を従北と呼ぶことが出来る』」『メディアウォッチ』2019年10月30日、2026年1月29日閲覧。
- (11) メディアウォッチ編集部「最高裁『挺対協を「従北」と呼ぶことが出来る』本紙最終勝訴」『メディアウォッチ』2020年2月27日、2026年1月29日閲覧。
- (12) 秦郁彦『慰安婦と戦場の性』1999年191～193頁、西岡力「『慰安婦問題』誰も誤報を訂正しない『諸君!』1997年5月号、この論文は1998年に出版した拙著『闇に挑む!』徳間文庫に収録した。
- (13) 韓国ネットメディア「ペンアンドマイク」YouTube放送2020年5月15日、2020年5月15日閲覧、本稿執筆の2026年1月30日現在では閲覧できない
- (14) 秦郁彦『幻の『従軍慰安婦』をねつ造した河野談話はこう直せ!』『諸君!』2007年7月号
- (15) メディアウォッチ編集部「挺対協『メディアウォッチ報道に深刻な憂慮を表明する』」『メディアウォッチ』2018年4月22日、2026年1月28日閲覧。
- (16) 「ペンアンドマイク」YouTube放送2020年5月15日。
- (17) 会見全文は、ネットニュース「月刊朝鮮ニュースルーム」2020年5月8日に掲載されている。会見で彼女はおおよそ次の4点を挙げて、挺対協を批判した。

1. 挺対協の集めた多額の寄付金が被害者に渡っていない。
 2. 挺対協の水曜集会は、参加する生徒らの心に傷をつけるもので、参加を止める。
 3. 尹美香は国会議員になるべきでない。
 4. 挺対協の証言集での自分の証言は間違っている。
- (18) 同上
- (19) 「李容洙おばあさんはなぜ『30年同行（一緒に活動した）』水曜集会を批判したのか」『ハンギョレ新聞』2020年5月9日
- (20) 西岡が李宇衍氏から聞き取った内容
- (21) 秦郁彦『慰安婦と戦場の性』韓国語版の訳者後記、同書533頁
- (22) 西岡の記憶で復元
- (23) 裁判については、『歴史認識問題研究』17号掲載の柳氏講演録参照
- (24) 国家基本問題研究所ウェブサイト「第八回（令和三年度）国基研 日本研究賞－受賞者と喜びのコメント」、2026年2月2日閲覧
- (25) 同フォーラム資料より西岡が翻訳。呂元副総統は2019年11月28日、韓国国会議員会館大会議室で演説した。
- (26) 歴史認識問題研究会編『佐渡金山における朝鮮人戦時労働の実態』60～61頁